

## 母子三代、インドで日本の伝統文化を

～デリーの街で母を想う～

江戸ソバリエ・ルシク 佐藤悦子

私は「旅行」より「旅」が好き。インド・ラダックの中心の町レーのバザール、手回しミシンを器用に操作し注文のジャケットを仕立てている横丁の仕立て屋の角を曲がると、その先にはさらに細い薄暗い路地が続く・・・頭の中には久保田早紀の「異邦人」が流れる。

今年の「第4回 インド・ラダック 蕎麦のルーツを探る」旅(2018年9月)に娘が参戦してきた。この展開にちょっと驚いた。実はこのインドの旅には私たち母子三代にとって何やら因縁があるようだ。

昨年の旅が終わるまで、私は母にはあまり興味がなかった・・・ごめんなさい。

父は戦争から帰った後、満足な職場を得ることができなかった。帰国後、次男の父は新婚時代を靖国神社裏の小さなアパートで暮らした。靖国神社で皆が踊るダンスに母を誘ったと思い出を語ったことがある。そんな生活を断念して、実家近くに土地を貰い「精米所」を開業。そんな父ですから、私を連れて外出した時にはレストランで洋食を、デザートにはパフェを注文してくれた。幼かった私にとって父はお洒落な紳士だった。そして、好奇心の塊だった私に父は何でも答えてくれる先生だった。私の「好奇心」は父に見守られて大きく成長していった。だから父のことは大好きだった。

それに対し母といえば蒸しパンや水飴を手作りしてくれた思い出や、ぐるっと回ると裾が広がるまん丸スカートやベスト等の洋服を沢山作ってくれた幼い頃が思い出される。母は、父に守られ我儘一杯育った私を心配してか口癖のように「女は・・・」「結婚したら・・・」といつも私に女であることを意識させた。高校時代の私はそんな母に反発し、男女ではなく自立した人間でありたいとも自分を律してきた。

あるとき、京大で“アフリカ学”を専攻した職場の友人が、退職してアフリカのタンザニアに留学すると言い出した。折角の機会と職場仲間がグループを作りタンザニアに行こうということになり、私も中学生と高校生だった子供たちを連れて行くことにした。このタンザニアに母が一緒に行きたいと言い出したのです。私は英語もろくに話せない。向こうにつけば案内人がいるとはいえ2人の子供を連れて行くのである、普段から病気がちの母を連れて行く訳にはいかないと冷たく断った。

そんな母もインド・デリーに3度も旅している。勿論知ってはいました、母達が生け花の師匠のお弟子さん仲間の外語大教授ラジャ先生のインドへの帰国に伴い、デリーの30ものお部屋のあるご自宅に遊びに行き、ラジャ先生がお仕事に行く間はお抱え運転手付きの車を一台用意して頂き、



ラジャ先生と生花の師匠



母の生けた花

市内観光をさせて貰ったという話は聞いていた。

ラジャ先生のお別れ会では、師匠のご指名で独身時代の私(私も弟子)が司会をしましたからサリー姿の素敵なラジャ先生の

ことも知っていましたが・・・お別れ会の後、私は結婚し仕事と育児に追われる毎日、母が新聞に載るような事をしていたなんて・・・昨年のラダックの旅の話をしてしに実家に行くまで知りませんでした。

昨年、蕎麦打ちの活動が当地の新聞に載ったことを伝えると、義姉は「やだ！この母子！、親子二代でインドの新聞に載るなんて」と言われびっくりした。

母はインドに帰国したラジャ教授の大学で日本文化である「生け花」を教えるため、3度もインドに渡航(1976～8年頃)をし、その活動が当地の新聞に載ったのだと知ることになったのです。残念ながらその後、実家は2度の引っ越しでその時の新聞は見つからない。



昨年のラダックでの活動が載った新聞 (私)

今回も最終日は半日程度のデリーの市内観光でした。蒸し暑いデリーの空気をリキシャの車窓から顔一杯に受けながら、母



デリーの街

が生花を教えたラジャ先生の大学は何処だったのだろうか、帰国したら未だ娘の参戦は義姉には伝えていないので、「母子三代になりました」と話しに行かなければと、ふと思った。

母はもう居ない。今居たら“口下手”な母だから、娘も孫もインドに行き、母子三代日本の伝統文化を伝える活動に参加したことをきつと喜んでにっこり笑っただろうと思う。



今年の活動が載った新聞 (中央後姿が娘)